人 の 生 き 方

2015/2/2

人はどんな生き方をすればよいのだろうか。80 年も生きてきて、白い雲浮かぶ緑の山などを見上げていると、そんな青年らしいことを思い浮かべます。自分は、人として恥ずかしくない生き方をして来たかと、自問自答すれば、決して「はい」とは言えない気もするが、全くダメだったとも思えない。なんとも中途半端で情けない。

Ⅰ. 神に似た生き方　　ただ、空の鳥を見ると、鳥には鳥の生き方があると感じ、たゆとう蝶を追うと、蝶には蝶の生き方が与えられていると思う。それに抗わないように生きるのが、自然ではないかと考える。だからと言って、人間の生き方は、彼らの生き方ほど単純ではない。そう想いをめぐらし、聖書を思い浮かべる。

全能の神が絶対の知力と権威をもって、あらゆる動物を造り、この地上に置いて下さった。人間もまた神によって造られ、生きるものとされた。ただ人間は、他のあらゆる生き物とは異なって、神の姿に似せて造られたと記されている。その意味を解き、掘り下げなければ、少なくても、神が意図された人間の在り方、人間の生き方は分からない。神は何の計画も目的もなしに、戯れに、また悪戯に万物をお造りになったのではないはずである。

魚は魚として生きるのが神の御心だとするならば、人間は人間として造られたままに生きるのが、ふさわしく思える。魚は猫として生きようとしてはならないし、人は豚の様に生きてはならない。人として生きるとはどういうことなのか。神に似せて造られたのだから、神の様に生きるのだと言われても、人間は神と同じく作られたのではないのだから、神の様に生きることはできない。しかし、神に似せて造られたのだから、神に似た生き方はできよう。

Ⅱ.　霊的な生き方　　神に似せて造られたとはどういうことか。神に似せて造られた人間と、神に似せては造られていない他の動物たちとは、なにが違い、どこが異なっているのか。この問いは比較的簡単である。人間は神と同じように霊的な性質を持ち、霊である神を感じ、霊的な世界を感じ、霊的な物事を感じる。そういう本能を持っている。だから、おおよそ人間と言われる種類の生き物は、すべて霊的な存在を感じながら、生きる。

低い次元から言うと、人間は幽霊だとかお化けだとかいう存在を想定して恐れる。天使だとか善良な霊的存在を感じて、保護を願う。それらを神々と呼ぶこともある。良くは理解できないが、そのような霊的世界が、自分たちの世界と重なって存在していると、科学的な知識や考え方に反して、感じてしまう。それは感覚であって理論や理屈ではない。だからよくわからなくて怖いのだ。口では唯物論を唱えている立派な大人が、夜、何かが怖くて、一人で小便にも行けないということも、聞いたことがある。

高い次元で思いを巡らせると、人間は目に見えず、手で触れることもできず、ことばで説明することもできない気高い存在を、感じることがある。理性や理屈を超えた、本能的感覚である。そして自分はその気高い存在に見守られ、命を与えられ、生かされていると感じることも少なくない。それで、思わず知らず、その存在に手を合わせ、「ありがとうございます」と、つぶやいてしまうこともある。その高貴な存在は、自分の知的能力や言語能力を、遥かに超えている大きな存在であるために、説明したいとも、説明しなければならないとも思えない。ただ、自分はその存在にいのちを与えられ、生かされていると感じて感謝を捧げ、喜びを謳うだけだ。

それが、人間らしい霊的な生き方ではなかろうか。木々は手を打ち鳴らして神をほめたたえると、詩人は歌っているが、人間は手を合わせ、意識的にこの気高い神に祈り、感謝を捧げる。手をかざして喜びをあらわす、宴を設けて歌い、祭りを仕立てて共に喜び称える。これが神の姿に似せられて、霊的存在として造られた、人間の生きるべき姿ではなかろうか。

Ⅲ.　人と人との付き合い　神は人に向かって「産めよ増えよ」とおっしゃった。それは、人が家族をつくり、共同体を形成し、社会的生活をすることを前提とした言い方で、人間は社会的動物として造られたということです。もちろん空

の鳥も、海の魚も、産めよ増えよの中に含められているのだが、ここで大切なのは、人が神の姿に似せて造られたうえで、「産めよ増えよ」と言われていることである。私たちの神は複数の神格（人格と同じ意味で）を持つ、一人の神であり、それぞれの神格が愛よって強く結ばれているという、特殊な存在である。いうなれば、初めから愛として存在し、初めから共同体として自在してきたお方である。

　したがって、人間同士の付き合いも、愛による共同体として存在すべきだった。ところが、人に移し与えられた神の御姿は、罪のために、傷つき、壊れ、歪み、いびつな存在となってしまった。それで人間同士の本来の付き合いも崩れ、愛し合い助け合う代わりに、争い合い傷つけあうことになってしまいました。神との在り方も歪み、神を忘れ、偶像に行きつくようになってしまったのだ。これが、人間の陥った悲劇である。

Ⅳ.　人間性の回復のために　ところが神は、自分の中に与えられていた神の姿を、傷つけ壊し、歪めてしまった人に手を差し延べて、傷をいやし、壊れたところを直し、ゆがみを矯正して、もともとの、本来の人間の姿に戻そうとしてくださった。それは人間の願いや努力の範疇を超え、人間の力ではまったく不可能なことではあるが、全能の神に不可能はない。その神の愛の御手が延ばされているというのが、福音である。そして、このことを聖書の教えによって理解した人たちが、神の使者、神から遣わされた人として、働いている。この神の愛に触れて、人間性を回復させてもらった人こそ、幸いな人なのである。

　もちろん、この不完全な世界に生きる限り、人間の回復も完全にはならない。しかし、この世界が造り変えられると言うのが、イエス様の教えであり、聖書の教えである。その時私たちも完全に造り変えられた人として、初めに神に似せて造られた時の様に、神との交わりを楽しみ、神の祝福を思う存分楽しむことが出来るようになるのだ。このことを理解した人たちが、いま、福音の語り手、福音の伝達者として献身し、身を粉にして働いている。人間性の回復のために、人の幸せのために生きることを、大きな喜びとしているのである。